広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	陣が平城跡出土の瓦質土器・擂鉢片に関する一考察
Author(s)	梅本，健治
Citation	広島大学埋蔵文化財調査研究紀要 ， 12 ： 1 - 12
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50705
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050705
Right	
Relation	

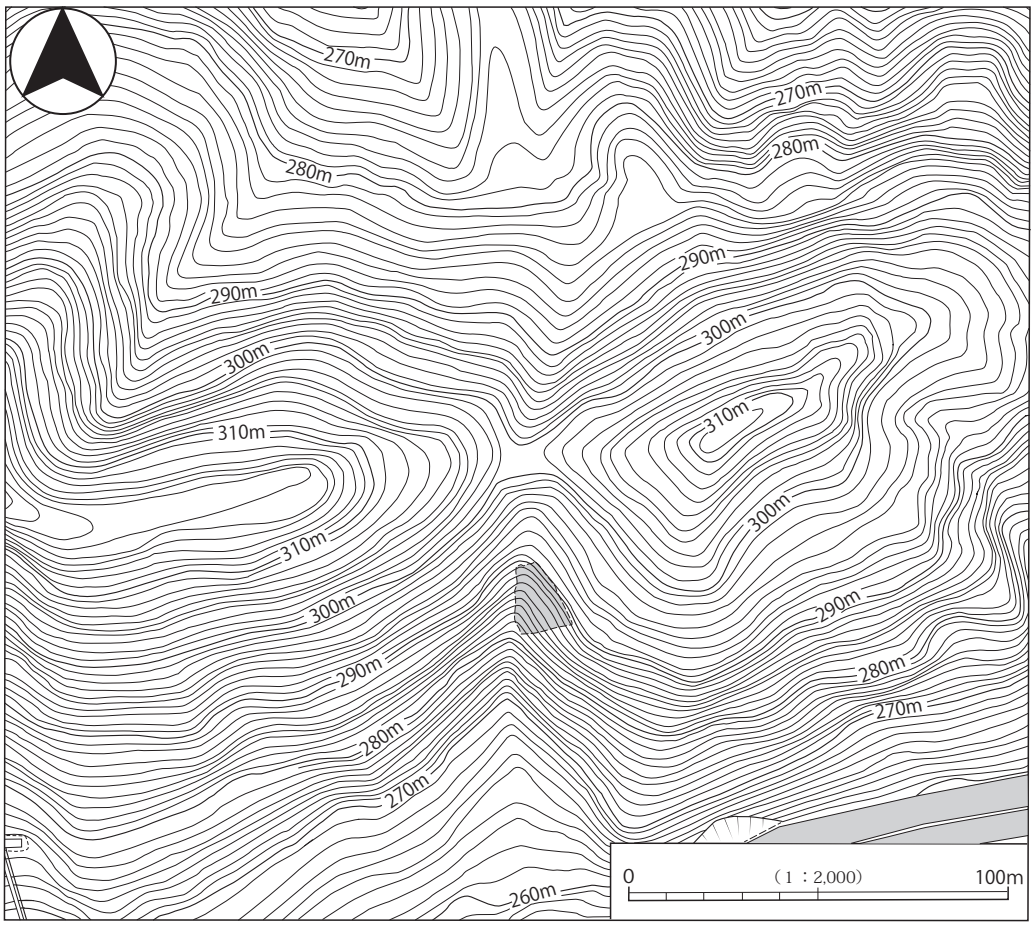
陣が平城跡出土の瓦質土器・擂鉢片に関する一考察

梅本　健治

本資料は 2019（令和元）年 10 ～ 11 月に行った陣が平山災害復旧工事（幼稚園駐車場東 2 地区）に際して出土した瓦質土器・擂鉢の底部片である。

1. 擂鉢片の出土位置と状況

擂鉢片は東西方向に細長く延びる丘陵尾根南斜面中央の、南南西～北方向の谷筋最奥部で出土したもので、重機による掘削土中からみつかった（第 1 図）。詳細な出土位置や状況は不明



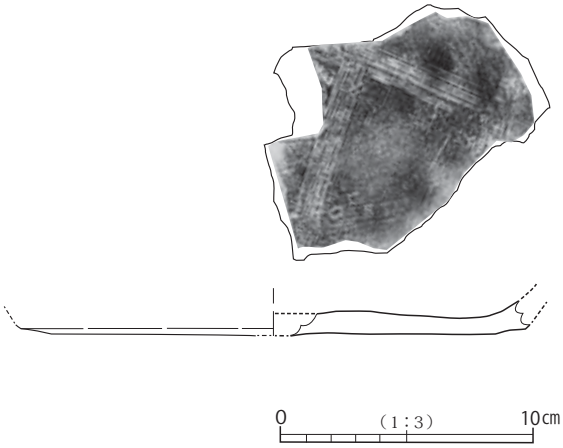
第1図　調査区配置図（1：2,000）
（中央のアミ目は調査区を示す）

である。災害復旧工事に伴うもので、掘削範囲内では遺構は検出されていない。ただ、丘陵尾根線上を中心にほぼ全域にわたって、中世の陣が平城跡の郭・竪堀・堀切等の遺構が広がっている。

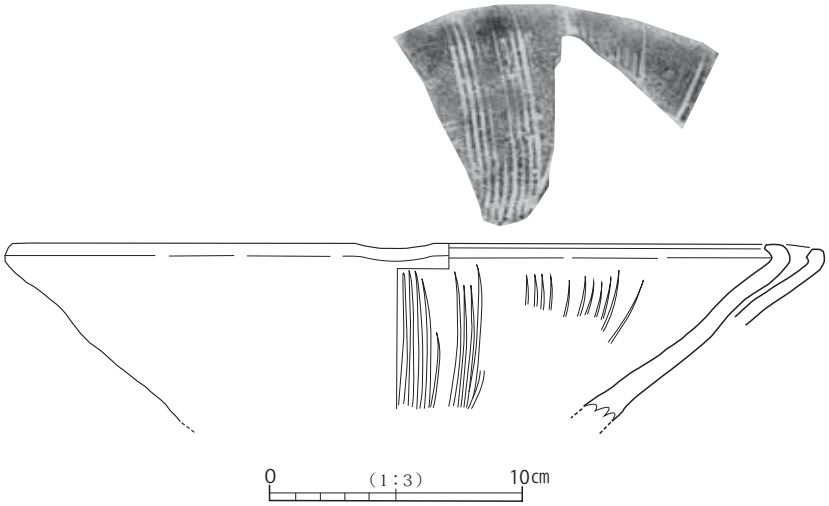
ここでは出土した擂鉢片の吟味を行うとともに、擂鉢片が出土した陣が平城跡の構造を近接する国史跡鏡山城跡と比較しながら検討することにより、擂鉢片出土のもつ意味などについて若干の考察を試みたい。

2. 擂鉢片の特徴（第２図、写真1-1・2）

本資料は平底のほぼ底部のみの破片である。この擂鉢片はその胎土や色調から一見土師質土器にみえるものの、瓦質土器である。残存は全体の 1/3 ほどで、外底面の円周の 1/10 程度が残る。復元底径は 19.8cm で、現存器高は 0.4cm である。体部下端部が一部残存する。胎土は１～２㎜大（最大５㎜大）の長石・石英粒などを比較的多く含む。焼成は良好で、色調は内面淡灰黄色、外面淡灰黄～淡灰色、胎土淡灰黄色である。調整は、内底面がやや細かい一定



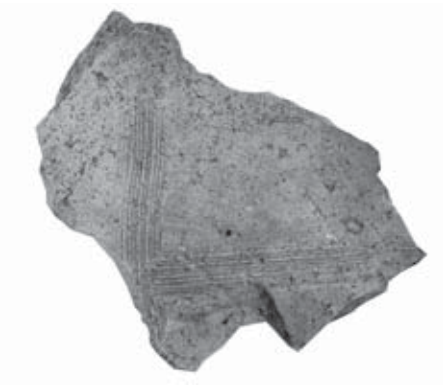
第２図　陣が平城跡出土擂鉢片実測図（1：3）



第３図　薬師城跡出土擂鉢片実測図（1：3）

方向のナデ、緩く斜め上方に屈曲する体部下端にはやや粗いヨコ方向のナデが施されている。外底面には不定方向の雑なナデつけを施し、僅かに残る体部下端外面には丁寧なナデがみられる。内底面にはＴ字状に浅く不整な擂目がみられる。擂目の一単位は幅 10 ～ 13 ㎜で 10 ～ 11 条程度の擂目が行われている。横方向の擂目が先行し、縦方向の擂目が後出する。Ｔ字状に擂目が施されているようにみえるが、中央が擦れて途切れた十字状の擂目と考えられる。

この擂鉢片は底部のみの破片であり、口縁・体部を欠失しているので明確ではないが、防長型擂鉢の可能性が高い。防長型擂鉢は、14 世紀前半に現在の倉敷市周辺で焼かれていたと推定される亀山焼の影響下に防長地域で生産が開始され、周防・長門国をはじめ北部九州など周防大内氏の支配地域を中心に出土する瓦質土器で、17 世紀前半頃まで生産・流通したと考えられている。今回、陣が平城跡南麓で出土した擂鉢片は、内底面に十字状の擂目がみられる。これは、様相 7 ～ 10 の擂鉢片の特徴とされ、大内Ⅲ・Ⅳ式に該当する[(1)]。時期は 15 世紀前半～ 16 世紀中頃に考えられているが、本資料は十字の一方の擂目の中央が途切れていて、後出的な様相を示しており、16 世紀前半～中頃のものである可能性が高い。



1-1 陣が平城跡

1-2 陣が平城跡

1-3 薬師城跡

1-4 下岡田遺跡

1-5 有井城跡

写真1 瓦質土器・擂鉢

3. 擂鉢片の類例

鈴木康之氏によれば、室町時代になると広島県域では瀬戸内沿岸を主体に、地域色の強い瓦質土器の擂鉢が目立つようになる。備後の草戸千軒町遺跡では亀山焼系の瓦質土器が、尾道遺跡をはじめ備後西部から安芸東半部にかけての広島県中央部では丸底のものが良くみられるようになる[(2)]（安芸高田市・郡山大通院谷遺跡、世羅町・大柳遺跡、尾道市・末近城跡、東広島市・山居遺跡など）。本例のような平底の瓦質の擂鉢の例は広島県西～中央部では少ない。防長型擂鉢は口縁が内側に屈曲し、直線的に外上方に延びる体部と平底が特徴の瓦質の擂鉢である。広島県西部（旧安芸国）の類例は少なく、現状では 3 例にすぎない（東広島市・薬師城跡、府中町・下岡田遺跡、広島市・有井城跡）。いずれも口縁部ないしは口縁～体部片で、底部の状況は窺うことはできない。ここでは、これらの防長型擂鉢の広島県西部における類例について触れていくことにする。

①薬師城跡出土例[(3)]（第 3 図、写真1-3）

東広島市河内町所在の小規模な城跡で、15 世紀後半～ 16 世紀末の時期の平賀氏関連（平賀氏或いは一族の入野氏など）の土豪・地侍層を城主とする館城（やかたじろ）と考えられている。東西方向に細長いほぼ単郭で南北長辺の際に各々細長く土塁が築かれている。本出土例はこの郭中央付近に位置する南北方向の石列 3 の掘り方内及び石列 3 近くのピットから出土した破片が接合した擂鉢口縁～体部片で、ごく浅い片口が残る。14cm × 10cm ほどの大きさの破片で、復元口径 29.0cm、現存器高 7cm 程度である。口縁端部を内側に短く屈曲させている。体部内面の擂目は 9 条／ 2.8cm を一単位とし、1 条の幅 1.5 ～ 2 ㎜、深さ 1 ㎜ほどと深く明確なものである。色調は表面暗灰色、胎土灰白色で、胎土は 1 ㎜大以下の砂粒を少量含む。焼成は良好である。

②下岡田遺跡出土例[(4)]（写真1-4）

広島市の東側に隣接する安芸郡府中町に所在する下岡田遺跡の一角で出土した瓦質土器・擂鉢の口縁部小片である。下岡田遺跡は古代山陽道の駅家の可能性が高い遺跡で、擂鉢片は古代の建物跡等が多数検出された丘陵南側の谷の底に入れられたトレンチから豊富な古代の遺物群とともに出土した。擂鉢片に伴う遺構は検出されておらず、混入或いは流れ込みの遺物とみられる。出土した擂鉢片は 5cm × 3.5cm 大の小片である。口縁上端面はやや内傾する平坦面で、内側に突出する度合いはそれほど強くない。内面口縁下端近くまで延びる擂目は現状で 6 条 /2cm 認められる。擂目に先行する横方向の強いナデあるいはハケ目が観察される。外面は丁寧なナデ調整かとみられる。色調は表面暗灰色、胎土（灰）白色～暗灰色で、胎土には砂粒をほとんど含んでいない。焼成は良好である。

③有井城跡出土例[(5)]（写真1-5）

有井城跡は広島市西部、佐伯区五日市町石内にある独立丘陵上に築かれた山城跡で、周防大内氏に与力したとみられる国人領主小幡（おばた）氏の居城と考えられている。15 世紀後半～ 16 世紀前半頃に城の盛期が想定されており、擂鉢片は主郭から 20 m程度下位の帯郭状の第 5 郭で出土している。11.5cm × 6cm 大の口縁部小片で、口径・器高等は復元できない。胎土は 1 ㎜大の白色長石粒や赤色土粒を少量含む。焼成はやや甘く、胎土中央は赤味のある黄褐色土で、表面は淡黄褐色を呈している。瓦質というより、土師質に近い。体部は口縁部側が厚く、底部側に向かって薄くなる。口縁は上端が平坦で、内面側に三角形状に突出している。体部内面に現状で 11 条／ 3cm の擂目が残る。擂目 1 条の幅 1.5 ～ 3 ㎜程度で、明瞭である。擂目の上方にはナナメ方向のハケ目ののち横方向のナデ調整が施されているのが観察される。外面には部分的に 1.5 ～ 2.5 ㎜間隔の幅広のハケ目が断続的に施され、これを横方向のナデで消している。色調は口縁内外の表面が灰黒色で、そのほかの内外面・胎土ともに淡黄褐色である。

4. 陣が平城跡の構造

陣が平城跡は国指定史跡鏡山城跡の北 800 mに位置する。両城跡の間には東西方向に幅 200 ～ 300 mの狭小な谷筋が延び、奥田大池など複数の人工のため池が並ぶ。この谷筋の西端には三方向に雨水が流下する小さな分水界が存在し、谷底はこの分水界から緩やかに西から東に下っており、その傾斜の緩やかさから往古には雨水が滞留しがちな湿地に近い状況であったのではないかと考えられる。即ち、陣が平城跡と鏡山城跡の間の谷部は湿地状態で、行き来のルートは限られていたと考えられる。このことは現在谷部を東西に貫くルートはブールバール（県道 195 号西条駅大学線）のみで、この道は谷底部ではなく、谷底から 10 ～ 20 mほど上位の北側の陣が平山・八幡山麓に造られていることからも分かる。ブールバールのルートは明治 31 年の旧道[6]ともほぼ重なっている。このことは『陰徳太平記[7]』の、鏡山城の麓に押し寄せた尼子軍と合戦した大内方の軍勢が日没時に城に引き返すのに、「細路ニ多勢行湊（ツド）ヒ、城ノ兵多ク討レニケリ」といった有様であったという描写からも窺うことができる。

陣が平城跡は丘陵尾根線上に郭を並べる連郭式の山城である（最高所の標高 322.9 m、比高 110 m）。その縄張り配置は既出の縄張り図[8]があるが、ここでは筆者が 2020（令和 2）年 10 月に実地踏査をし、城郭関連の遺構の残存状況を観察した内容を述べる。陣が平城跡は東西方向に細長い城域で、大きく東西二つの郭群に分かれ、西郭群の西端で北西方向と南西方向の二股に分岐する。西郭群の東端と東郭群中心部の東端に虎口が存在する。東郭群の西半は郭 2 つが東西に並ぶが、東半にはほぼ自然尾根が続き、2 か所に出丸状の小郭が存在する。城域全体の北側は切岸が厳しく（斜面の傾斜角度 29°～ 45°；平均 36°）、緩やかな西側から南斜面（16°

～27°；平均24°）にかけては竪堀が複数個所存在する。尾根を断ち切る堀切は10か所程度確認される。城域の随所に1m大ほどの岩塊がみられるが、これらの中には郭の出入口や標識的な意味合いを持つものも存在すると考えられる。規模の大きな石垣はみられないが、数10cm大の角礫を1段程度並べた小規模な石垣あるいは石積が西郭群で3か所、東郭群で1か所確認できる。中心的な郭は西郭群で、東郭群は従属的な存在とみられる。西郭群の西端と中央付近の2か所に櫓台状の高まりが存在する。切岸は北斜面側にあり、南斜面側は連続竪堀が存在するものの切岸はなく全体に斜面の傾斜も緩い。これらのことから、陣が平城跡は全体に北斜面側及び東方に警戒を強くしていると考えられる。

擂鉢片が出土したのは西郭群と東郭群が接するあたりの南斜面で、両郭群を画する規模の大きな堀切とそこから南に延びる通路も兼ねた大規模な竪堀（通路）が存在する。西郭群東端にはこれらに通じる虎口状のものが観察できる。このように擂鉢片が出土した地点は、陣が平城跡南面中央の種々の機能を有する城郭遺構が集まる個所であり、城の大手に当たる位置である可能性が高いと考えられる。

5. 鏡山城跡の構造（第4図）

陣が平城跡の南側に近接する国史跡鏡山城跡は、東西に長い丘陵尾根線上（最高所の標高335.3m、比高120m）に築かれた、東西方向に郭が連なる連郭式の山城である。郭の中心は西側の1・2郭（両者の比高差1m）で、2郭の東に5郭（比高差20m）、北側に帯郭状の小郭数個から成る北郭群（比高差25m）、南に3郭（比高差20m）を配する。更に、3郭東半の虎口を経由して南側の大手門跡と思われる虎口をもつ小郭に至る。そこから大手道を下り南麓近くには複数の小郭から成る南郭群が存在する。主要な郭が連なる尾根線上には西側に3本、東側に2本の尾根を断ち切る堀切が設けられており、尾根線の西端と北郭群の北側及び北東側の計3か所には出丸が築かれている。北斜面・南斜面の両斜面に数多くの連続竪堀が設けられているが、北斜面側のものが長大で密度が高い。鏡山城跡の主体的な郭である1・2郭（「御殿場」・「中のダバ」）と東側の5郭を取り巻く切岸の傾斜角度は35°～45°と特に厳しい。多くの連続竪堀はこの切岸の下端部から下位に設けられているが、その部分の斜面の傾斜角度は北斜面が22°、南斜面が40°→25°と緩い。概して、連続竪堀が築かれている部分の南側斜面は傾斜がきつく、同じく北側斜面は傾斜がやや緩い傾向があるが、これは北側斜面と南側斜面では同じ連続竪堀でも性格の違いがあることを示唆していると思われる。いずれにしろ、搦め手に当たる城の北斜面側は出丸の配置や連続竪堀の密なあり方など警戒が厳しく、大手の南斜面側は警戒がやや緩い傾向がみられる。

6. 陣が平城跡と鏡山城跡の構造の比較

陣が平城跡と鏡山城跡は東広島市中央部にあり、東西 2.2km、南北 2.5km の大きさの山塊の北半に築かれている。山塊の北側には西に陣が平城跡、東側には八幡山城跡が築かれており、山塊の中央部には鏡山城跡が位置する。鏡山城跡の南西側の山塊（ががら山）にも城砦的機能を持つ遺構群が広がる。[9]

陣が平城跡と鏡山城跡は、上でみてきたように構造的にいくつかの類似点がある。

・東西方向に郭が連なる連郭式の山城である。

・中心的な郭（郭群）が城域の西側に存在する。

・城の大手が城域の南側中央に位置し、北側が搦め手である。

・北側の搦め手は切岸が厳しい。

・搦め手側を中心に出丸を複数築いている。

同じ連郭式でも鏡山城跡は西端の 1・2 郭が最高所に位置し、隣接する 3・5 郭や北郭群との比高差が 20 ～ 25 mと高低差が大きいのに対して、陣が平城跡の郭は高低差が 1.5 ～ 5 mと小さく、また郭の造作もシンプルである。鏡山城跡の中心部（1・2・5 郭）は厳しい切岸が郭群を全周しているのに対し、陣が平城跡では搦め手である北斜面側にのみ切岸が築かれ、大手の南斜面側には顕著な切岸は存在しない。切岸、連続竪堀、出丸といった城の防御機能のパーツの、城域における配置状況・位置や郭からの斜面の傾斜角度などを勘案すれば、陣が平城跡は城域の北斜面側及び東側に警戒が厳しく、城域の北、東側に敵対勢力の存在が考えられる。一方、鏡山城跡は城域の北斜面側及び北東側、西側に強く警戒網を

第 4 図　鏡山城跡縄張り図（約1：2,000）
（東広島市教育委員会提供）

張っており、これらの方面に敵対勢力の存在が想定されよう。

このように多くの類似点を持つ陣が平城跡・鏡山城跡は、同一の戦略・陣法をもつ勢力によって、同一の敵対勢力に対陣するべく築かれたものである可能性が高い。

鏡山（鏡）城の文献上の初見は寛正 6（1465）年頃（小早川熙平宛細川勝元感状写、「小早川家証文」134）であるが、すでに南北朝時代末期には東西条の地に大内氏の支配の手が及んでいたとみられる（至徳元（1384）.11.21 足利義満御教書、「小早川家文書」70）ことから、東西条支配の拠点としての鏡山城の築城そのものが更に遡る可能性がある。即ち、周防大内氏が東西条支配の拠点をより西方の杣（曽場ヶ）城（1527 年頃築城）、更には槌山城（1551 年落城）に移す 16 世紀前半～半ばまでの 100 年以上もの間、鏡山城は周防大内氏の東西条さらには安芸国支配の拠点であった。この鏡山城跡は文献で確認できる範囲では、少なくとも 3 回の落城の憂き目にあっている。二度目の落城は大永 3（1523）年の出雲尼子経久の攻略によるもので、大永 5（1525）年には大内氏によって奪還されている。この尼子経久による鏡山城攻略は一般に「鏡山合戦（鏡山城の戦い）」といわれているが、一次史料によってこの戦いの具体的な様相を明らかにすることは難しい。現状では、この合戦についての最も古い記録は天正 8（1580）年に完成した厳島神社神官（棚守職）野坂房顕の『棚守房顕覚書』[10]で、この戦で宗徒 1000 人ほどが討ち死にしたというごく短い記述があるにすぎない。一方、『陰徳太平記』の記載によれば、尼子軍は陣が平城と東側の八幡山城との間にある「下見峠（したみたお）」に陣を張り、その南方の「満願寺」に毛利元就の軍が陣を敷いたとある。しかし、陣が平城や東側の八幡山城に尼子軍が陣を敷いたという記述はない。抑も、この『陰徳太平記』は鏡山合戦から 200 年近くのちの江戸時代中期（1717 年）に出版された、毛利元就の事績を顕彰する意味合いが強い軍記物で、史料としての信頼性はあまり高くないとされている[11]。ただ、一般にはこの『陰徳太平記』の記載から陣が平城や八幡山城に尼子軍が陣を張り、鏡山城に陣取る周防大内氏の軍勢を打ち破ったと理解されている。しかし、既に記したように、一次史料による限り、尼子軍と陣が平城との関わりは何ら明確な根拠を伴うものではないのである。

なお、主に毛利元就の事蹟を顕彰する目的で書かれたもので比較的早い時期に属するものとしては、岩国藩の「二宮佐渡覚書」[12]（1603 年以前成立）と「森脇覚書」[13]（1621 年以前成立）があるが、いずれも鏡山合戦の記述はない。この二つの覚書に触発されて、のちに本藩の萩藩が毛利輝元の命で作成したものとして、「桂岌圓覚書」[14]（1622 年成立）、「老翁物語」[15]（1624 年成立）がある。いずれも冒頭近くに 1523 年の鏡山合戦の記述がみられる。「老翁物語」は内容が簡略に過ぎるとされた「桂岌圓覚書」をもとに、古老や古文書類を参考に増補したものである。以上の覚書類は内容的には軍記に属するものであるが、いずれも鏡山合戦から 100 年後の成立である。

前述の『陰徳太平記』の成立・刊行から100年近く遡り、史料的価値や信頼性も『陰徳太平記』に比べてある程度は勝ると思われる。「桂岌圓覚書」の鏡山合戦の記述はごく簡単なもので参考となるものはないが、「古老物語」には2、3ほかの類書にない記述がみられる。ひとつは尼子軍が「したみたを（下見峠）」に在陣し、打ち続いて「ゆふねたを（湯船峠？）」に陣を敷いたとあることである。「ゆふねたを」が現在のどこに比定されるのかは不明であるが、「下見峠」の近隣であろう。もうひとつ注目されるのは、鏡山城跡の構造に関わる記述で、「城四方の岸能く候て、攻上り候事相成らず」とあり、鏡山城の切岸の厳しさに言及している。

7. 大内氏の東西条支配の実態

周防大内氏の安芸支配の拠点としての“東西条”は東条郷と西条郷から成るが、その範囲は旧賀茂郡域にほぼ重なるといわれるものの、具体的には明確ではない。旧賀茂郡域は合併前の東広島市域を主体に、黒瀬町・安芸津町、呉市東部、広島市安芸区阿戸町、そして竹原市西～中央部が該当する。東西条の範囲を窺う手がかりとしては、大永3（1523）年8月10日安芸東西条所所知行注文（平賀家文書243）がある。この文書は6月に尼子経久が鏡山城を攻略したあと、尼子氏に与力した安芸国人へ領地分配を行ったもので、当時の少なくとも尼子氏が大内氏から奪取した東西条の範囲がある程度窺えると思われる。この文書によると、当時の東西条は、北は久芳、西は阿土、東は河内村、南は仁賀田、河尻、三浦、広浦、内海など現在の呉市東半の瀬戸内沿岸域にまで及んでおり、全体で5,075貫の収穫高が記録されている。

東西条における周防大内氏の支配の実態はあまり明確ではないが、その一端を垣間見るうえで、大内氏の本拠である山口の中心寺院の末寺が2ヶ寺存在する点が注目される。一つは東西条東条郷三永にある福成寺で、応永元（1394）年10月13日氷上山別当法印宛大内義弘福成寺別当職預ケ状案（興隆寺文書）や（年不詳）3月21日氷上別当御坊宛毛利弘元書状（延徳3＝1493年？）によって、山口の大内氏氏寺である氷上山興隆寺（天台宗）の末寺であったことが確認できる。また、現在のJR西条駅周辺の「東西条寺町」内に所在した大福寺（時宗）が山口善福寺の末寺であることが、永享11（1439）年3月3日善福寺末寺注文（『萩藩閥閲録』第4巻所収「防長寺社証文」山口善福寺）に記載されている。これらのことは、大内氏の東西条支配が単に軍勢を駐屯させる軍政主体の支配ではなく、信仰（宗教）を介する住民との強い結びつきを伴う地域支配を意図していたことを示していると思われる。

しかし、大内氏の安芸国支配は決して安定したものではなかった。安芸国東部から備後国にかけての東方には細川氏・山名氏・尼子氏、広島湾岸域には安芸分郡守護の武田氏といった手強い敵対勢力との抗争のはざまで、幾度となく毛利氏をはじめとする平賀氏・天野氏・阿曽沼氏

など安芸国人衆の向背が繰り返された。ただ、室町時代～戦国期にかけて、東西条を中心に安芸国の一角に、周防大内氏が一定度の勢力を保ち続けたことは明らかである。その考古学的な証の一つとして、旧安芸国南部を中心に、「大内式」として包括される瓦質土器（防長型擂鉢など）や土師質土器の皿など、大内氏の本拠である周防山口を中心に出土する大内系の遺物が出土する山城跡が存在する（広島市・有井城跡、東広島市・薬師城跡、同・泥田城跡[16]など）。これらの城主はいずれも小勢力ではあるが、東西条を中心に安芸南部に周防大内氏の足跡が確実に残されているといえる。なお、文献資料によって、平賀氏や天野氏、阿曽沼氏、野間氏、竹原小早川氏など、時に向背を繰り返しながらも周防大内氏の与力として活動した諸勢力についても、将来的に考古学的調査等によって、その城郭（縄張り構造・各パーツの形態・出土遺物）や墓（石塔の形態・埋葬遺物）、寺院跡（構造・本末関係）、城下町（構造・出土遺物）などに何らかの周防大内氏の影響や痕跡を窺うことができる可能性は高いと思われる。

8. おわりに

以上、縷々と駄文を弄してきたが、これらをまとめると次のようになろう。

①陣が平城跡南麓で出土した瓦質土器・擂鉢片は山口県を中心に中世大内氏の支配圏で出土する“防長型擂鉢”である可能性が高い。

②擂鉢片が出土したのは、国史跡鏡山城跡の北側に近接する陣が平城跡南麓中央で、陣が平城の大手にあたる個所とみられる。

③陣が平城跡は、江戸時代の軍記物『陰徳太平記』の記載から、一般には 1523 年の鏡山合戦に際して、尼子軍が陣を張った城跡と理解されているものの、信頼に足る一次史料による根拠はない。

④縄張り図や実地踏査による限りでは、陣が平城跡は周防大内氏の安芸支配の拠点であった鏡山城跡と構造が類似しており、大内氏の城郭である可能性が高い。

①～④から、今回「防長型擂鉢」の可能性が高い瓦質土器・擂鉢片が出土した陣が平城跡は、従来言われていたように鏡山合戦に際して尼子軍が在陣した陣城ではなく、むしろ陣が平城の東側の下見峠などに在陣した尼子軍に敵対した周防大内氏の勢力が在陣した城郭（陣城）である可能性が高いと考えられる。

筆を擱くにあたり、有益なご教示をいただいた方々と貴重な出土遺物の閲覧に便宜を図っていただいた諸機関に感謝を述べたい（敬称略、50 音順）。

岩崎仁志（山口県埋蔵文化財センター調査第一課長）

北島大輔（山口市教育委員会文化財保護課）

熊原康博（広島大学大学院人間社会科学研究科准教授）

鈴木康之（県立広島大学地域創生学部国際文化学科教授）

吉瀬勝康（特定非営利活動法人文化遺産トラストほうふ代表）

公益財団法人広島市文化財団、東広島市教育委員会、東広島市出土文化財管理センター、広島県府中町教育委員会、山口市教育委員会。

注

(1) 岩崎仁志「防長型擂鉢の成立と展開－防長型瓦質土器の再検討－（1）」『山口考古』第 37 号 2017 年。

(2) 鈴木康之「草戸千軒町遺跡の擂鉢さまざま」『備前歴史フォーラム "摺る" ～擂鉢からみえる中世の社会～』備前市教育委員会・備前市歴史民俗資料館 2010 年。

(3) 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター『薬師城跡』1996 年。
薬師城跡出土擂鉢片は報告書の図版 22（出土遺物 5）の上端中央に写真が掲載されているものの，実測図は未掲載である。今回，実測図・拓影は筆者が実測・拓本したものを，また写真は筆者がデジタルカメラで撮影したものを，それぞれ東広島市出土文化財管理センターの許可を得て掲載した。

(4) 広島県安芸郡府中町教育委員会『下岡田遺跡発掘調査概報（1983 年度）』1984 年。
下岡田遺跡出土擂鉢片の実測図は報告書に掲載されている。写真は擂鉢片閲覧に際して筆者が撮影したものを府中町教育委員会社会教育課の許可を得て掲載した。

(5) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『有井城跡発掘調査報告』1993 年。
有井城跡出土擂鉢片の実測図は報告書に掲載されている。写真は擂鉢片閲覧に際して筆者が撮影したものを，公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課の許可を得て掲載した。

(6) 二万分一地形図「西條町（明治 31 年）」「小多田（明治 31 年）」による。
『正式二万分一地形図集成 中国・四国 2』柏書房 2002 年。

(7) 国立国会図書館デジタルコレクション（『関西陰徳太平記』合本・巻 1-18，松江・大山仙之助 1911 年）。

(8) 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第 2 集 1994 年。

(9) 東広島市教育委員会『鏡山城跡発掘調査報告書－重要遺跡（鏡山城跡ががら地区）範囲確認事業に係る発掘調査－』2013 年。

(10) 宮島町『棚守房顕覚書 付・解説』1975 年。

(11) 長谷川博史「尼子経久論」岸田裕之編『毛利元就と地域社会』中国新聞社 2007 年。

(12)（13）米原正義校注『中国史料集』人物往来社 1976 年。

(14)（15）三坂圭治校注『毛利史料集』人物往来社 1976 年。

(16) 財団法人 東広島市教育文化振興事業団『泥田城跡発掘調査報告書－小規模防災事業に係る発掘調査－』2010 年。

参考文献（50 音順）

・乾貴子「戦国期山口城下における城館と屋敷神－周防守護別邸『築山』について－」『山口県地方史研究』74 1995 年。

・小都隆・佐伯邦芳「広島県史跡鏡山城跡調査報告書」『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会 1987 年。

・古文化の会・近畿大学 2 部歴史研究会編『安芸・西条鏡山城リポート 付：陣ケ平山・八幡山（竜王山）』古文化の会 1974 年。

・長谷川博史『大内氏の興亡と西日本社会』吉川弘文館 2020 年。

・東広島市教育委員会『鏡山城　その歴史と意義 – 大内氏の地方支配を探る –』1999 年。
・東広島市教育委員会『鏡山城跡発掘調査報告書 – 重要遺跡（鏡山城跡ががら地区）範囲確認事業に係る発掘調査 –』2013 年。
・東広島教育委員会『鏡山城跡リーフレット』（第 4 図はこのリーフレット（裏）の「鏡山城跡要図」を東広島市教育委員会の許可を得て掲載した）。
・平瀬直樹『大内氏の領国支配と宗教』塙書房　2017 年。
・真木隆行「大内氏と寺社」大内氏歴史文化研究会編（伊藤幸司責任編集）『室町戦国日本の覇者　大内氏の世界をさぐる』勉誠出版　2019 年。
・松岡久人「大内氏の安芸国支配」『大内氏の研究』清文堂出版　2011 年。
・横川知司・熊原康博編『西条地歴ウォーク』レタープレス　2020 年。
・吉野健志「安芸の大内氏の城」小都隆編『安芸の城館 – 城館 50 選と安芸の城館の実像 –』ハーベスト出版　2020 年。

Consideration of the earthenware-motor piece excavated in the Jingahira Castle ruins

Kenji Umemoto

In this paper I discussed the earthenware-motor materials excavated through disaster recovery work during the 2019 fiscal year. The earthenware-motor piece is very similar to the “Bo-Cho typed motor（**防長型擂鉢**）” which were excavated in areas under the control of the Suo-Ouchi clan（**周防大内氏**）in the Middle Ages, mainly in present-day Yamaguchi Prefecture. This motor piece was excavated from the ruins of the Jingahira Castle（**陣が平城跡**）in Saijo-cho,Higashihiroshima City, which is adjacent to the north side of a national historic site: the Kagamiyama Castle ruins（**鏡山城跡**）. Kagamiyama Castle was the center of the “To-saijo（**東西条**）” region where the Suo-Ouchi clan were and the base of the Aki country（**安芸国**）rule. Jingahira Castle was traditionally believed to be where the army of the Izumo-Amago clan（**出雲尼子氏**）put up a camp when they captured Kagamiyama Castle in 1523. However ,considering the similarity of the territorial structure（**縄張り構造**）of castle, the Jingahira Castle was likely to be built by the Ouchi clan just like with the Kagamiyama Castle. And that seems to support the similarity of the earthenware-motor piece excavated at Jingahira Castle ruins to the “Bo-Cho typed motor”.